
文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言 (課題番号19320063) 研究代表者：長谷川信子 2010年6月

はしがき

本報告書は、平成19年度から3年間の予定で、研究代表者（長谷川信子）がセンター長を務める神田外語大学言語科学研究センター（CLS）を拠点に遂行している研究プロジェクト『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』の初年度の活動で得た成果をまとめたものである。このプロジェクトの概要と意義については、巻頭（pp. 1-4）に稿を改めて述べるが、日本語の主文現象を集中的に考察することにより、語用的機能と統語構造・操作の関係を理論的に探ろうとするものである。この研究の性質は理論研究であるが、その推進には、日本語学からの知見が不可欠である。その意味で、本研究の遂行が、生成文法研究と日本語学での研究成果のこれまで以上の結びつき、および、これら当該分野間の生産的かつ活発な交流の活性化をもたらすことを期待したい。本研究は、研究代表者1名により申請された研究であるが、上記の意味からも、代表者の長谷川は、研究全体の計画・方向性に責任を持つが、実際の研究活動は、広く理論言語学者、日本語学研究者を巻き込みながら推進することを計画しており、初年度である平成19年度には、次頁にリストした多くの研究協力者からの支援を受け、本報告書の成果に至った。

本プロジェクトの研究は、上記のような性格から、研究代表者の個人研究の進展は当然だが、むしろ、(i) 公開ワークショップの開催、(ii) 定期研究会「科研サロン」の開催、(iii) 複数の報告書・論文集の公刊、を精力的に遂行し、このテーマでの研究への興味の喚起と重要性の認識を広める活動を中心としている。

平成19年度には、計3回の比較的大きなワークショップ—9月3日に神田外語大学の姉妹教育機関である神田外語学院（都内、神田駅近く）で『語用機能と統語論』、10月20日に東京国際フォーラムで海外からLiliane Haegeman氏、Guglielmo Cinque氏を迎えての『理論言語学ワークショップ』※1、1月26日に神田外語学院で『日本語学と理論言語学：文の語用的機能を視野に入れて』—を都内で開催した。これらのプログラムと発表要旨は本報告書の巻末に記載してあるが、そこで発表された論文の多くは、本報告書の第1部、および、今年度のCLS紀要Scientific Approaches to Language, No. 7に掲載した。また、「科研サロン」では、院生も積極的に参加し、インフォーマルな雰囲気の中、様々なトピック・現象を自由に討議しており、そこから発展した研究成果が本報告書の第2部に掲載してある。未だworking paperの域を出ないものもあるが、扱った現象や視点など、今後に発展する可能性を秘めた興味深い論文となっている。

初年度1年間で、これだけの成果をあげることができたのは、一重に、上記ワークショップ、科研サロン等で、発表・参加して下さった協力者の方々のお陰である。深く感謝したい。特に、MIT言語哲学科教授の宮川繁氏（2008年5月から1年余りSabbaticalにより神田外語大学施設に滞在）には、ワークショップ、科研サロンだけでなく、神田外語大学CLSで行われている日々の研究活動に大いに貢献していただいた。また、CLS研究員の神谷昇さんには、ワークショップや科研サロンの開催、本報告書の取りまとめなど、本プロジェクト遂行全ての面において多大な尽力をいただいた。本学大学院生、研究生には、上記のワークショップや科研サロンの開催にまつわる「雑用」を含め、CLSでの研究活動を大いに盛り上げてもらっている。そして、CLSの椎名千香子さんには、研究補助、本研究補助金の管理・執行、様々な事務連絡等、大変お世話になっている。心から感謝の意を表したい。

※1 このワークショップの次の日（2007年10月21日）には、同じく東京国際フォーラムにおいて、神田外語大学開学20周年記念行事に伴う大学院主催の講演会があり、そこでも、本研究プロジェクトと関わる講演がなされた。そこでの、Haegeman氏の講演と宮川繁氏（MIT）によるコメントは、本研究報告書に収録されている。

2008年3月31日
長谷川 信子

長谷川 信子
節のタイプと呼応現象：CPシステムと空主語の認可

一致現象の典型は英語などの言語に見られる「主語と述語の一致」であるが、それは日本語では観察できない。特定の語用機能（例えば命令文）の観点から考察すると、日本語にも「特定人称主語と述語・文末形態」の間に一致現象が豊富に観察できることは、日本語学の分野でも指摘されている（例えば、仁田(1991)）。本論文では、それらをCP要素と主語との一致として分析できることを論じ、その上で、命令文などで観察される空主語（主語の省略、無声化）は、CP要素と一致した場合に可能になるとの「空主語認可の条件」を提示し、それが、日本語に限らず英語の日記文などで観察される主文の1人称主語省略現象などを説明できることを示す。さらに、この条件が、CPの機能と構造の観点から、PROやproといった主語の空範疇を、CPによる認可として、統一的に分析できることを論じる。

遠藤 喜雄

普遍的な統語構造地図における日本語の終助詞

最近ヨーロッパを中心に開発中の言語研究プロジェクトとして普遍的な統語構造地図(cartography of syntactic structures)の作成計画がある。本論文の目標は、このプロジェクトの内容を概観し、日本語からどのような貢献が可能であるかを論じる点にある。特に終助詞の特質を比較統語論の観点から考察し、統語構造地図の階層により終助詞の語順が決定されることを見る。また、終助詞が拡大投射原理を満たす際に重要な役割を演じることを示す。

石居 康男

日本語の「懸垂疑問文」に関する一考察

本論は、動詞に選択されず付加部として機能している疑問従属節を考察する。この種の疑問節には、WH疑問とYes/No疑問の2種類があり、両者は、意味的機能が異なる一方、共に「か」の前に「の」を要求し、主節が疑問文になれないという共通点もある。これらの疑問節（「懸垂疑問文」）の統語的・意味的な特徴を動詞に選択された通常の埋め込み疑問文と比較しながら分析することによって、日本語におけるWH句の認可条件および節末の「か」の特性についての手がかりが得られることを示す。

奥 聡

情報構造とミニマリスト

本論は統語と運用システムの接点であるインターフェイスに積極的な機能を持たせるReinhart (2006)のモデルを用い、日本語の情報構造に関する機能主義的研究の知見と、経済性の原理を中心としたミニマリストの統語論研究の知見とを、有意義な形で結びつける可能性を探る試みである。具体的には、reference-set computationというインターフェイスでのメカニズムを仮定することにより、日本語の省略現象の一部に対して原理的な説明を与えることができることを論じる。

有田 節子

日本語の副詞節における時制節性と意味について—条件文を中心に—

本稿は、日本語の文の階層性に着目した一連の研究においていわゆる（時制）節レベルとされる副詞節の統語的性質が様ではなく、時制節に二種類を認める必要があることを論じる。言い換えれば、従来の時制節と非時制節の中間のレベル（「不完全時制節」（有田2004, 2007a））を認めるということである。日本語において「時制節」の認定基準は必ずしも明らかではない。本稿は、時制節と非時制節を分類するのに、A) 主節とは独立した動作主格が顕在化できるかどうか、B) 副詞節の出来事時と主節の出来事時の時間関係が固定しているかどうか、の二つの基準を設け、主節とは独立した動作主格が顕在化でき、主節の出来事時との時間関係が固定されていないような副詞節を時制節とする。その上で、「基本形」と「夕形」のどちらの形式も出現できる節を完全時制節、どちらか一方しか出現できない、あるいはどちらも出現できない節で、かつ、主節とは独立した動作主格が節の内部に顕在化しうような節を不完全時制節と呼んで区別する。その区別の日本語文法における重要性を特に日本語条件節に見られる興味深い現象を手がかりに論じていく。

Jun Abe (阿部 潤)

Embedded Sluicing in Japanese

It will be demonstrated that there exist genuine instances of embedded sluicing in Japanese, contrary to the current belief that it is reduced to truncated clefts. It will be argued that the reason why such a construction behaves like a cleft rather than a sluice is attributed to a PF anti-adjacency requirement that prohibits the sequence of a wh-phrase and a question marker. Given

this, it will be shown that only in such elliptic configurations that do not violate this condition are instantiated genuine sluices.

Liliane Haegeman The Syntax of Adverbial Clauses

(要旨がないので、Introductionの文章を掲載しておきました)

The central concern of this paper is the observation that English temporal and conditional adverbial clauses resist argument fronting. I will show that a movement analysis of adverbial clauses (going back to Geis (1970, 1975), and also adopted by, among others, Larson (1985, 1987, 1990), Penner and Bader (1995), Demirdache and Uribe-Etxebarria (2004: 165-176), Bhatt and Pancheva (2006)) allows us to analyse this restriction as the result of an intervention effect. The movement account also allows us to predict (i) that not all English adverbial clauses are incompatible with argument fronting, (ii) that in Romance languages adverbial clauses are compatible with clitic left dislocation, and (iii) that temporal adverbial clauses offer a favourable environment for French Stylistic Inversion. The paper will also explore to what extent the movement account will allow us to account for the restricted distribution of certain sentential adverbials in adverbial clauses.

Liliane Haegeman (和訳・補足：長谷川 信子) Subject Omission in Present-day Written English: On the Theoretical Relevance of Peripheral Data (handout) (現代英語における主語の省略：周辺の現象の理論的考察)

現代英語でも、くだけた口語表現、日記文やメモなどでは主語が省略されることがある。そうした周辺の特定レジスター（言語表現使用域、表現形態）も、理論的な考察対象となる興味深い現象であり、その分析を提示する。まず、このレジスターにおける主語省略現象を記述的に概観したうえで、この現象は、ロマンス言語で広く観察される主語省略（いわゆるpro drop）とも異なり、また、中国語（日本語）などで見られる、話題化要素の省略とも異なることを論じる。この省略は、母語習得時の発話に見られる主語省略と似ていることを指摘し、最近のRizzi (2005)他のCP構造、およびChomsky (2001)のphase (位相) 毎のスペルアウト（音声化）操作の観点から、主文の最上位範疇の取り方の違いにより、可能となるとの分析を提示する。つまり、スペルアウトは、位相となる機能範疇の補部で可能となるわけであるが、主語が最上位の位相の指定部に存在する場合は、スペルアウトの対象にならず、音声化されない、つまり、「省略」されることとなる。他方、語彙主語は、最上位の位相の指定部にあるのではなく、その補部内にあることからスペルアウトの対象となるのである。この枠組みに従えば、特定レジスターでは、最上位となる位相が、通常の英語とは異なり、その指定部に残された主語がスペルアウトされず空主語となる、との説明である。語彙主語と空主語で生起する場所が異なることを示唆するデータも提示する。こうしたレジスターに加え、近年英国の英語で観察される「電報文」的な省略現象があるが、それは、ここで扱うレジスターにおける主語省略とは省略の環境、条件が異なることから、同様には扱えないことを指摘する。最後に、様々な日記文に見られる主語の形態（空主語か語彙主語か）とそれらの生起環境を数値で示した表をAppendixとして提示する。
(要旨は長谷川信子による)

Shigeru Miyagawa (宮川 繁) Comments on the Symposium Papers

(要旨がないので、論文の始めの部分を掲載しておきます。)

What follows are my comments to the papers presented at the International Symposium on Linguistics Syntactic Structure and Functional Categories organized by the Kanda University of International Studies. Of the three papers presented, by Professors Hasegawa, Haegeman, and Cinque, I was able to prepare the written comments below for the first two. My comments for Professor Cinque's paper were already starting to take shape as an independent paper, and I hope to pursue it at a future date.

井上 和子 談話構成法から見た日本語

談話構成法の基本的原理である「結合性の維持」を支える統語的手段について考察し、統語構造が担う情報構造について検討した。その上で情報構造が談話の成立を左右するとの仮説を立て、これを日本語の談話の導入文を用いて検討し、ある程度の成果を得た。さらに談話の結合性を保つ統語的手段の中で接続詞の使用と語彙項目の反復を取り上げ、日・英語の比較を行った。

神谷 昇

日英語のYes / No 疑問文の答えの統語構造

本稿は英語と日本語のyes / no疑問文の答えの文の派生について検討する。より具体的には、Lobeck (1990)の削除構文の分析を援用し、英語のyes / no疑問文の答えの文にはPFでのvP削除が関与するが、日本語のyes / no疑問文の答えの文には動詞のCへの統語的移動とPFでのTP削除が関与すると提案する。そして、英語と日本語で削除される範疇の違いはMiyagawa (2005, 2007)の一致素性の存在する場所が言語によって異なるという提案と関連していることを主張する。

上原 由美子

「ありがとう」の先行節の「くれて」について

本稿では、「ありがとう」の先行節が必ず「くれて」を伴う現象について統語的な観点から論じる。「ありがとう」という形式が真正モーダルの特徴を持っており、統語構造上でCPシステム内のModの主要部にありと仮定すると、この現象は、Modの[+Speaker]素性を満たすために「くれる」が必ず必要であるという点から説明できることを示す。ただし、「ありがとう」は、真正モーダルの特徴と語彙範疇の特徴を併せ持っており、典型的な真正モーダルとは違いがある。統語的な理由から「ありがとう」の先行節に「くれる」が必要であるという説明は、日本語の授受表現が恩恵のやりとりを表すという意味の面だけでなく、統語的にも重要な役割を果たしているということの一例を示すことになる。

長谷部 郁子

日本語の形容詞のテンスとモダリティ

本論で取り扱うのは、「悲しい」「嬉しい」のような話者のモダリティを表す形容詞である。本論では、これらの形容詞は、受益者が話者であることを前提とする授与動詞「くれる」などと同じ語彙的なモダリティ表現であるとし、これらの語彙的モダリティ表現は、CPシステムの一部であるModPの主要部との照合により話者のモダリティを表すようになると主張する。そして、本論の枠組みが語彙的モダリティ表現の主語制限や項の省略現象について一貫した説明を与えることを示す。

眞鍋 雅子

統語と意味から見たXナラ

日本語学の考察では、ナラはそれに先行する構造的要素が文の場合（文ナラ）と体言の場合（体言ナラ）とで、異なるナラとして扱われることが一般的である。しかし本稿では、体言ナラも文ナラと区別せず、同様に扱うことが望ましいことを以下の観点から論じる。(i)文ナラの持つ「仮定」と「前提」の機能を体言ナラも持つこと、(ii)「仮定」のナラと「前提」のナラは文の階層構造のレベルが異なること、(iii)「仮定」のナラがとる文の構造は、体言ナラ・文ナラともに、主題の八がとる構造とは南(1974)の文の階層構造の観点から異なること、以上3点に言及して体言ナラと文ナラは統一的に扱うべきであることを論じる。(iii)については、主文現象に関わるナラ(仮定条件)と八(主題)の境界に関わる問題が、記述的な日本語研究の知見と最近の統語論における理論的研究の取組みを生かすことで構造的に説明できることを提示する。